



沢田内科医院 ニュースレター

第101号

医師会ねぶた

今年も医師会のねぶたに参加しました。弘前市医師会では組ねぶたも作っていますが、私は時間がなくて実際に作りに行くことはありませんでした。作り始めの景気づけの時と紙を張ったねぶたに墨入れをする時のバーベキューの会に行っただけでした。暑い中での作業ですので、飲み物の差し入れもちょっと。

今年は、雨に降られることもなく、8月1日、3日、5日の3日間を皆勤しました。看護専門学校学生も参加しています。毎年、准看護学科1年生は、「弘前市医師会」と書かれた前灯籠を押



ねぶたの半纏を着た准看護学科1年生
向かって右端が棟方翔子さん



看護学科2年生
向かって右端が小堀未希さん、3人目が棟方孝奈さん

し、看護学科2年生は「弘前市医師会」の高張提灯を肩にかついで歩きます。私は、医師会の役員としてねぶたの先頭集団の中で歩いていますが、学校長ですので、すぐ前を歩く学生のことにも気になります。

准看護学科1年には棟方翔子さんが在学しています。3日にねぶたの半纏を着て前灯籠を押して参加です。1日にはお姉さんの棟方孝奈さんが高張提灯を担ぎました。職員の小堀未希さんも看護専門学校の教員として参加しました。高張提灯を担ぐ看護学科学生のサポートですが、途中で自分でも担いでいました。



左端が小堀未希さん
学生と教員の区別が付きません
赤いたすきをつけたのが教員です

ねぶたの運行には、医師会会員と家族はもちろん、看護学生、医師会に関係する人たちが120人から150人くらい参加します。運行が終わった後は、医師会の屋上で懇親会です。ねぶたで死亡事故があった後は、運行中のアルコールの扱いが厳しくなりました。その代わり、懇親会で酔っぱらうかということもありません。

大勢の参加者がありますので、とにかく事故がなく終わることが一番です。手にちょっと軽いけがをした参加者もありましたが、大きな事故もなく今年も終了しました。体力があるうちは参加するつもりです。

弘前消防署を見学

看護専門学校が休み中の8月18日に弘前消防本部を見学してきました。もちろん沢田内科医院へ救急車で患者さんは運ばれてきますし、私たちも救急車で大きな病院へ患者さんを運んでもらいます。その救急車がどのように運用されているのか、119番に電話するとどのようなになっているのか、救急隊員はどのようにして待機しているのか、私たちがお世話になっている消防署の表面には見えないところを知るのが目的でした。



ませんので、救急車で運んでくれると非常に助かります。

予想よりも多かったのですが、救急救命士は99人いました。全員が救急車に乗っているわけではなく、事務的な仕事をしている人、研修中の人などもあります。気管にチューブを入れる資格、薬剤を使用するための研修など、いろいろな研修を受けて私たちのために頑張っていることが分かりました。

実際の消火や救急にあたる人たちは3交代ではありませんでした。

1日中ずっと張り付いているようです。当然、食事

も消防署の中で摂りますが、近くの食堂から出前を頼んだり、コンビニ弁当で間に合わせてはいませんでした。若い職員が別の部屋で食事を作っていました。つまり、相撲部屋のちゃんこ鍋ではありませんが、消防署の職員は自炊をしているのです。ですから、消防署員になるとかなりの料理の腕を持つ人になれるということです。

弘前地区の消防は、弘前市だけでなく、黒石市、平川市、藤崎町、板柳町、大鰐町、田舎館村、西目屋村の3市3町2村をカバーしています。住民は約30万人で、弘前に2つ、黒石、平川、板柳に消防署があり、分署が10ヶ所で職員が約450人います。

平成28年の1年間に、救急車の出動件数は約10,000件でした。1日平均27件、1時間に1回出動していることになりま

す。人口17万5,000人の弘前市に限ると、出動件数が約6,400件でしたので、弘前市民は1年間に27人に1人が救急車のお世話になっていることになります。沢田内科医院から大学病院など、医療機関間の転送がそのうち約1,400件でした。心筋梗塞や呼吸が困難な患者さんなどは、普通の自動車では移動でき



消防は昭和23年に警察から分離し、昭和38年から救急を扱うようになったそうです。沢田内科医院では、平成18年に消防署を見学したことがありますが、新しく加わった職員のために、改めて見学へ行ってきました。119番すると、いろいろな仕組みが動き出します。そして、それに備えて待機している人たちがいます。

うようになったそうです。沢田内科医院では、平成18年に消防署を見学したことがありますが、新しく加わった職員のために、改めて見学へ行ってきました。119番すると、いろいろな仕組みが動き出します。そして、それに備えて待機している人たちがいます。

大腸がん検診でたくさんの大腸癌が見つかっています

平成28年の1年間に弘前市の大腸がん検診を1,302人に行いました。大腸がん検診は、便の中に血液が混じっていないかを検査するものです。病気を疑った時は、検診ではなく沢田内科医院の検査として便潜血検査を行っています。今回の数字は、医院の検

査ではなく、弘前市医師会健診センターで検査を行う大腸がん検診の数字です。

1,302人のうち、107人が便に血液が入っていると判定されました。通常の大腸がん検診では、陽性率

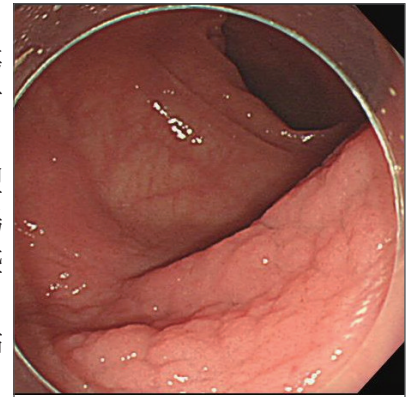
が6～7%ですが、沢田内科医院を經由して行った大腸がん検診でチェックされたのは8.2%でした。これは、受診者の平均年齢が高いためです。

107人のうち、大腸内視鏡検査で精密検査をしたのは99人、93%でした。異常なかった人が40人、検査でその場で進行がんと診断した人が6人でした。ポリープが53人で、このうち切除したポリープが病理検査で大腸癌と診断された人が5人でした。つまり、1,302人が大腸がん検診を受け、精密検査した99人のうち11人が大腸癌だったのです。この人たちは症状が全くない人たちなのです。

進行癌6人のうち、3人が今回初めて大腸がん検診を受けた人でした。きっと、この人たちも検診を受けていれば、もっと早い段階で見つかったはずで、逆に78歳の男性は、平成23年から毎年受けていて6回目で便潜血検査が陽性となり進行癌が見つかりました。腫瘍はそれほど大きくはなく、幸いにも手術で治療できました。これらの数字を見ても、大腸がん検診を毎年続けて受けることが重要であることが分かります。

早い段階で見つかり、広い範囲の腫瘍でも内視鏡で治療することができます。

写真は、側方発育型腫瘍といわれる大腸癌です。それほど盛り上がるわけではありませんが周辺の粘膜とは違いモコモコした低いポリープが広い範囲でたくさん



モコモコした部分が腫瘍です

集まったように見えます。この患者さんは、開腹手術ではなく、内視鏡で切除することができました。

平成28年に弘前市の大腸がん検診を受けた人は約16,000人でした。そのうち1,302人が沢田内科医院からの検査数でした。通院している人が大腸癌で亡くなるのを見たくないの、私は口をすっぱくして大腸がん検診を勧めています。弘前市では毎年90～100人が大腸癌で亡くなっています。毎年、大腸がん検診を受けていれば、このうちのかかりの人は亡くならずすんだはずで

中学生のピロリ菌検査と胃がん内視鏡検診

ん検診の検査としては不
適当なことは分かるので

ピロリ菌が胃癌の原因であることが分かっています。沢田内科医院ではこれまで約1,500人のピロリ菌除菌治療を行いました。除菌してピロリ菌がいなくなれば胃癌にならないのではありません。事実、除菌した人の中で胃癌になった人はたくさんいます。昨年1年間で、開腹手術をしないで内視鏡治療ができる胃癌が4例見つかりました。今年もすでに4人の人に内視鏡治療ができる胃癌が見つかりました。

これだけを見ても、ピロリ菌の治療をしてもきちんと定期的に内視鏡検査を受けなければならないことが分かります。逆に、内視鏡検査で胃粘膜が正常で、精密検査でピロリ菌がいないと判定した場合には、胃がん検診は3年に1回でよいとしています。3年に1回というのは決まった基準があるのではなく、私自身の経験から3年以内に見つかった胃癌は手術をすれば助かるという個人的な判断です。

ただ、残念なことに、最近、3年目で内視鏡検査を行った人に進行した食道癌が見つかりました。毎年やっていれば、もっと早く見つかったのではないかという思いがあります。非常に稀なことを考えていると、すべての人に負担がかかることになり、胃が

すが、臨床医としては残念なことです。

弘前市に対してピロリ菌対策を提案してきました。平成26年には胃がんリスク検診が開始されました。青森県内では弘前市だけの事業です。その後、中学生に対してピロリ菌検査を行う事業を提案してきました。まだ、正式に決まってはいませんが、今年度中に実施される予定です。

弘前市の中学2年生は約1,600人います。これまでの他の地区での結果から、弘前市でも約5%、80人ほどがピロリ菌に感染していると予想されます。この中学生のピロリ菌を除菌することで、将来の胃癌の死亡数を限りなくゼロに近づけるのが目的です。最近の弘前市の胃癌での死亡数は80～90人です。これは死亡数ですので、胃癌を発症する人は少なくともこの2倍はいることになります。

ピロリ菌の事業と関連して、弘前市に対して胃がん検診を内視鏡検査で行うことを提案しています。内視鏡検査と同時にピロリ菌の感染がないかを検査して、胃癌の死亡数を極力少なくするのが目的です。早ければ来年からでも始まるかも知れません。弘前市医師会はいづれ始まっていいように準備しています。

樋口直樹先生

国立弘前病院の2年目の研修医樋口直樹先生が地域医療研修で沢田内科医院へ来ました。仙台医療センターで救急の研修も受けていますので、今回は、ほぼすべて糖尿病など慢性疾患の外来診療を主体にして研修を行いました。

私もそうでしたが、新人の頃は診断するためにどうしても検査に頼ってしまいます。私は、弘大医学部の講義でも医学生に向かって、「患者さんの話を聞くと、8割は診断できます。」と言います。すると、かなりの医学生は信じません。でも、きっとベテランの医師になった時に、このことを思い出してくれると思っています。

ということで、しっかり話を聴いて、しっかり診察するとどういことが体の中で起きているかがよく分かるということを研修の目的としました。診察しているその時点の症状に注目してしまいがちです



来年から直也と同僚になります
私の次男は市内の開業医で働いていますが、弘大歯科口腔外科に勤めていました

が、それまでの時間を追って症状を把握すると、よく理解できるようになるということです。

患者さんを診た後で振り返ってみると、樋口先生はよく勉強していろいろなことを知っていることが分

かりました。ぼんやりと知っていても試験は通りますが、臨床現場でははっきり覚えて、それを確実に実行に移していかなければなりません。臨床研修では、その知識を一つずつ確実にして、自分の物にするようにとアドバイスしました。

樋口先生のことは弘大医学部に入学した頃から知っていました。お父さんは、私の1年後輩で同じ弘大第一内科で勉強した仲間なのです。お父さんよりも口数が多い好青年です。そして、来年からは弘大消化器血液内科に所属します。私の長男の直也も消化器血液内科にいますが、二人はすでに顔見知りでした。



職員に囲まれた樋口直樹先生